

名作の尊重〈摘録〉

大西重孝

〈出典：「観照」第三号、昭和21年10月〉

扱て古靱太夫は『紙屋治兵衛』の「新地茶屋」を語った。終戦以来数多くの世話物を聴いてきたが、流石に近松原作の強味で、よし半二の改訂が加えられているにしても、この一段の限り曲中の人情が悪く歪められているところがなくて情味豊かな聴きものである。

廓の騒ぎ唄めかした弾き出しが清六の絃によって軽くスネた如く弾かれると、極く僅かな間を腹で堪えていて、虚心の視線を虚空に投げていた古靱の口が「天満に」とひらけて「イ——」と巧みな音を遣って出るこの枕が見事である。そして二度目の「毎夜の」を陰に沈めて、あと一瞬の間をおいて「死覚悟」と軽く語りすてるところ「とぼとぼうかうか」とさまよい出る治兵衛の身のまわりに卒然と暗い翳がさす思いがする。

「歯ぎりぎりぎり」は治兵衛の人形が腕まくりして地団太を踏むところであるが、その治兵衛の激情を語っておいてすぐ「内には小春が啣ち泣き」とカワッテ一現の客にしか過ぎない孫右衛門をとらえて、小春が義理につまった愛想づかしを語って行く表裏の表現が充分で、また治兵衛の詞で「障子に写る二人の横顔、エエ喰はせたい、ハハはりたい」と「アーアーアレアレ何ぬかすやら頷き合ひ」とのあいだに無の間を語ることによって、激昂した治兵衛の心ばかりか、動作までも極めて生き生きと描破されたことを特筆したい。こうした小春と治兵衛との間に挟まれた孫右衛門の心が、二人の言動を反映して移り変って行く様が、この一段の背骨であるが、古靱の語りを中心もこの孫右衛門にあるのは云うまでもなく、心持の変化が以前より一層自然になって来たことは擽まない琢磨の賜物であろう。「馬鹿をつくした此刀」以下の地色に古靱一流の心持を滲ませた具合が聴者の胸を打つ「新地茶屋」は古靱の世話物の中でも第一に指を折られる傑作である。

但し「最前は侍冥利」を侍で威つく「今は粉屋の孫右衛門」と町人にカワって語るのは定法だそうだが、見せかけも何もない生地の孫右衛門に返ってからの詞としては、余りに文句につき過ぎた不必要な技巧ではないだろうか。疑問とする。

—二一・一〇・一二—